



ドクター・ハザマの

バイタルサイン塾 18

医師の「謎解き」と薬剤師の「謎解き」

ファルメディコ株式会社
 大阪大学大学院医学系研究科生体機能補完医学講座
 医師・医学博士 狭間 研至

医療の醍醐味の1つにつながっている 医師が診療で行う「謎解き」の中身

医師は自分で診療を行う際に、必ず「謎解き」を行っています。

たとえば、18歳の女性が「お腹が痛い」と外来を受診したとしましょう。医師は、その患者さんに対して、解剖学・生理学、病理学・病態学の知識を駆使し、実際の診察、血液検査やレントゲン・エコーなどの画像検査も駆使して、腹痛を来しうるさまざまな病気から「これだ!」という病名を選択します。たとえばこの症例では、虫垂炎・大腸憩室炎・急性胃炎・イレウスなどの消化管のものか、卵巣嚢腫や子宮筋腫・子宮外妊娠などの婦人科系のものか、はたまた詐病も含めて考えたうえで、症状や病歴、種々の検査所見から病名を選択します。これが、診断です。

診断が確定すれば、それに基づく治療方針を立てることができます。治療は薬物治療が中心になりますが、それだけでは治癒が難しい場合には、外科治療も選択肢に入れ最善の治療法を選択します。たとえば、虫垂炎なら、保存的に抗生物質を投与するか、場合によっては手術を行うか、といった具合です。

診療の中では必ず、これら一連の思考過程を、患者さんに身体的な所見や客観的なデータを交えて、わかりやすく説明します。つまり、「あなたの腹痛の原因は、～というわけです」という「謎解き」です。

そしてその謎解きの結果(=診断)に基づいた治療を選択・実施し、実際に患者さんの腹痛が軽快すると、患者さんにとっては「ああ、先生の言うとおりだった」ということになり、医師に対する患者さんの信頼が築かれていきます。これが医療の醍醐味の1つだと思えます。

薬剤師の「謎解き」の理論が 医師と同様ならば、行う意義は小さい

では、薬剤師による「謎解き」とは何でしょうか? OTC薬を使用するプライマリ・ケアとしての薬局・薬剤師の活動では、前述のような過程を薬剤師もたどることが多いはずですが、最近では「薬剤師による臨床判断」という表現もあります。OTC薬の適正使用・医療安全の確保の観点から、この患者さんにこのOTC薬使用(=販売)の是非を判断する、というものです。

ただ現在、薬剤師の業務のかなりの部分は、医師の処方に基づく調剤になっていますので、ここでの「謎解き」のあり方を考えることになります。ここでの注意点としては、医師と同様の謎解きをする意義はほとんどないということです。

医師が処方せんなり処方オーダーなりを発行するという事は、解剖・生理・病理・病態学や治療学に基づいた医師による「謎解き」は、すでに終わっているということです。薬剤師による「謎解き」が、この医師と同様の理論に基づいて行うことの意義は小さいと思います。

その理由は2つあります。1つは、薬剤師は「医療薬学」という分野で解剖・生理・病理・病態学に加え治療学も学んでいるのですが、やはり餅は餅屋、医師の専門性が優位であるということです。

もう1つは、薬剤師が、医師とは大きくことなる視点から医療の質や結果を判断・チェックしていくことが、チーム医療を行ううえでは大切だということです。

すなわち、薬剤師が薬剤師ならではの「謎解き」を行うことが重要で、その根底にある知識は、薬学教育の中で重点的に学ぶ部分になるはずですが、それが薬理学・薬物動態学・製剤学などに基づく知識だと思えます。